



「神に栄光、地に平和」(要旨)  
聖書箇所：ルカの福音書2章8-20節

「なんのために生まれて なにをして生きるのか こたえられないなんて そんなのはいやだ」(やなせたかし『アパノマチ』より)

▶人は自然と自分の生きる目的や意味を知りたいと願うのでしょうか。

### 【1】夜番をしていた羊飼

当時のパリサイ派は人間を大きく三種類(「義人」「地の民」「罪人」)に分けました。

救い主の誕生を最初に知ったのは、当時の社会で人々から蔑まれていた「地の民」である羊飼たちでした。羊飼たちは自分たちで救い主を見出したのではなく、御使いの知らせによって救い主のお生まれを知りました。

羊飼いのベツレヘムの野原での夜番は過酷な日常業務でした(創世記31:40)。一年の大半を戸外で過ごす羊を外敵から守るために必要不可欠な仕事でした。三月と四月、十月と十一月の高原の夜は羊飼いの厚い毛皮の外套を着ていても寒さが厳しく、全く眠れないことがあった<sup>1</sup>といます。御使いは、羊飼いが予期しないタイミングに訪れました。突然「主の栄光が周りを照らした」ので、羊飼いたちは非常に恐れしました。見たことがない光と御使いの出現。彼らの見慣れた光景は一変しました。彼らの視線は、地面に寝そべる羊から、天の御使いたちに向けられました。

### 【2】羊飼いに届けられた喜びの知らせ

天から遣わされた御使いは、羊飼いたちに救い主誕生の知らせを届けました。「…私は、この民全体に与えられる、大きな喜びを告げ知らせます。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりごを見つけます。それが、あなたがたのためのしるしです。」(ルカ2:10-12)

御使いの知らせを聞いた羊飼いは驚くと同時に安心したことでしょう。救い主キリストが生まれた場所も、寝ているという飼葉桶も、よく知っていたからです。彼らは、御使いの言う「この民全体」に「地の民」である自分たちが含まれていると知り、その出来事を見届けることにしました(ルカ2:15)。

主の使いが最初に知らせを届けたのが「羊飼い」でした。預言者イザヤの「わたしは、高く聖なる所に住み、砕かれた人、へりくだった人とともに住む。」(イザヤ57:15)が、イエスの誕生によって成就したのです。

### 【3】神に栄光、地に平和

「すると突然、その御使いと一緒におびただしい数の天の軍勢が現れて、神を賛美した」(ルカ2:13)と、御使いと天の軍勢の賛美は羊飼いの目を天に向けさせました。「グロリヤ イン エクセルシス デオ」「いと高き所で、栄光が神にあるように」(ルカ2:14)という御使いと天の軍勢の賛美。天の軍勢の賛美は、みどりごとなられた方の真の姿を羊飼いに垣間見せたのでした。キリストは、いと高き所からこの地にお生まれくださいました。イエスを通して、人は天の神の栄光を見ます。そして神をたたえる者とされます。驚くべきことに、この地上において、人はキリストの平和にあずかる者とされるのです。

救い主誕生の知らせを聞き、みどりごを捜し当てた羊飼いの心に喜びが溢れました。彼らは「神をあがめ、賛美しながら帰って行った」(ルカ2:20)のです。

▷人の生きる目的とは何でしょうか。私たちの信仰の先輩は次のように答えました。「人間の第一の目的は、神に栄光を帰し、永遠に神を喜びとすることです<sup>2</sup>」

<sup>1</sup> タニエル・ロプス『イエス時代の日常生活』山本書店

<sup>2</sup> 松谷好明訳『ウェストミンスター小教理問答』一麦出版社